

病は知から

認知症

脳に障害が起こることによって、生活に支障をきたすようになる「認知症」。早期に治療を始めるためにも、正しい理解が欠かせません。

「認知症」って、どんな病気？

さまざまなタイプがある

アルツハイマー型認知症

脳血管性認知症

レビー小体型認知症



最も多いタイプ。特殊なたんぱく質が脳内にたまり神経細胞が壊れるため、「記憶が抜ける」「日時が分からなくなる」などゆっくりと進行する。



脳梗塞などの脳血管障害が原因。障害の場所や程度によって症状が異なり、障害が起きるたびに症状が悪化していくのが特徴。



レビー小体というたんぱく質が脳にたまるのが原因。“ないものが見える”幻視や、パーキンソン病のような症状が現れることが多い。

他にも「前頭側頭型認知症」などさまざまなタイプがあります。

「忘れた」という自覚がない



「昨日の晩ご飯は何だったっけ？」というのは、加齢による物忘れ。認知症では、食べたこと自体を忘れるので、「忘れた」という自覚がありません。

生活習慣病がリスクに



脳血管性認知症のリスクを高めるのは「生活習慣病」。糖尿病の人は、アルツハイマー型認知症も発症しやすくなります。

生活習慣改善と運動で予防



1回30分  
週3〜4回の運動を

バランスの良い食事と規則正しい生活が基本。有酸素運動は、認知機能の低下を防ぐことが分かっています。

まずはかかりつけ医へ



「認知症では？」と疑ったら、まずはかかりつけ医に相談を。専門医を紹介してくれるので、内科でも大丈夫です。

もし自分が、家族が認知症になったら……  
知っておきたい「認知症」のこと

認知症患者数は、2025年には700万人を超える推計されています。大切なのは、病気を理解し、いたずらに不安を抱えないこと。神経内科の先生に聞きました。



生活習慣の改善と  
運動習慣が予防のカギ

ご家族の理解と支援が  
患者さんの不安を  
軽くします

副院長  
神経内科  
芳川 浩男 主任教授

認知症にはさまざまなタイプがあり、少しずつ治療方法も違うため、正確な診断をすることが重要です。まずは、問診や認知機能テストのほか、血液検査、MRIや脳血流SPECTのような脳画像検査、脳波の検査などで鑑別診断を行います。MCI(軽度認知障害)の段階で発見できれば、適切な治療を開始し、進行を遅らせることも可能です。また、正常圧水頭症や慢性硬膜下血腫、あるいは甲状腺のホルモン分泌異常などが原因の場合、治療により認知機能が改善することもあります。

認知症というと、物忘れなどの記憶障害がまずイメージされますが、加齢による普通の物忘れと異なるのは、「忘れている自覚がない」という点です。取り繕いをしたり、指摘を受けて怒り出したりするのも病的な反応と考えられます。認知症の中核症状としては、記憶障害のほか、日時や場所が分からなくなる見当識障害、物事を行うための段取りが

が  
あります。BPSD(周辺症状)は患者さんによって異なり、睡眠障害やうつ、幻覚、徘徊などさまざまな症状がみられます。

県から専門機関としての指定を受けている兵庫医科大学病院の認知症疾患医療センターでは、かかりつけ医など医療機関の紹介を受けて、年間200例に上る鑑別診断を行っています。専任のソーシャルワーカー1名、認定看護師1名を配し、専門医療相談を受け付けているほか、情報発信や地域と連携した支援活動にも力を入れています。

進行を遅らせるためには、何よりご家族の理解と支援が欠かせません。大切なのは、患者さんのあるがままを受け入れること。きちんと背景を知ったうえで心理療法などを行うと、BPSDが改善する場合もあります。患者さんやご家族からしっかりと話を伺い、置かれた状況や症状の出る原因をきちんと把握するよう努めています。